

日風堂

第23号 1997年3月31日

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

土佐国分寺の板絵光明眞言曼荼羅

—土佐神社の旧蔵品—

高知県文化財保護審議委員 岡本 健児

永祿六年（一五六三）における本山氏の岡豊城攻撃時に土佐神社も類焼した。しかし、神社にはそれ以前の多くの宝物類を伝えていた。私の専門分野では奈良末・平安初期の作とみられる振矛に使われた玉矛（鯨尾矛）、桜花双鳥方鏡等の藤原鏡以下二〇面に近い平安・鎌倉・室町各時代の和鏡、湖州鏡、天文一八年（一五四九）の阿弥陀・十一面観音を本尊とする懸仏、そして、天文廿一年銘の鰐口等が類焼を免れたものであるが、うち懸仏二口は今は行方不明となっている。さて、今回の名宝展に展示されない土佐神社の宗教遺品がある。もちろん、これは現土佐神社にはなく、神宮・善楽両寺の明治四年の廃寺以後土佐国分寺に移された。この宗教遺品を南国市教委が調査した際に筆者も立ち会ったが、土佐神社の信仰の歴史を知る上には重要な遺品である。それ故に、この遺品とその歴史的背景を紹介しよう。

土佐国分寺金堂の外陣、それも南側の壁面上部に円形の大きな大日如来坐像画が二面存する。大日如来ゆえに胎蔵界と金剛界の二面である。これらは円形の杉板に描かれたもので、両面とも中央に蓮花座に坐した大日如来を配し、その周囲に右廻りに梵字で光明眞言を二四文字で描く。ただ、本尊大日如来は金剛界と胎蔵界では智拳印と定印の違いをみせている。胎蔵界は径二・一五メートル、金剛界は二・七メートルで共に数枚の杉板で円形を造る。以上、紹介した二枚の板絵は板絵両界光明眞言曼荼羅と呼ぶべき遺品である。胎蔵界光明眞言曼荼羅は、その大日如来の描き方から室町時代の作、金剛界のものは同様にその描く手法から江戸時代のもものとみられる。今次の調査は壁面より降ろして調査したので、両曼荼羅の板裏に残った墨書を明確にし得たのは非常な幸運であった。

胎蔵界曼荼羅の墨書は、慶長年間の墨書と、明治三年の長文の墨書とからなる。慶長年間の墨書はその文字が不鮮明のため全ての解説は難しいが、慶長年間に破却したものを修理に及んだとみられる文の如く解される。明治三年の墨書は長文のなかに次の如き注目すべき銘文がある。「一宮□□掛ルトコロノ日月ノ円類ハ明治元年王政復古……ノ御一新ニヨツテ善楽精舎茶庵ニ抛却シアリ」、「慶長年間遠州掛川郡ヨリ先君一豊公様御入国ノ刻供奉シテ此ノ国ニ来レル掛川屋庄九郎……」、「修補ノヲリカラ撰州兵庫津土藩御問屋何某と云モノ四国拝霊ニ来リ銀二百目寄附セリ遂ニ五日ニシテ成就シ……」、以上の文により、この曼荼羅はもと土佐神社の□□（筆者註拝殿か？）に掛けられ四国遍路の崇拜の対象であったことを物語る。また、室町時代作胎蔵界曼荼羅は慶長年間（掛川屋の発起）と明治三年（兵庫港土藩問屋の寄進）の二度の修理を経て今日に伝わったものであることがわかる。さらに、金剛界曼荼羅の墨書は「奉寄進文化十四年丑六日」とし、その作が江戸時代後期であることを示す。また、「南無四国八十八ヶ所惣霊場当国一ノ宮奉納金剛界光明眞言」と記し、併せて「南無四国八十八ヶ所惣霊場勸請当国」と記して、この曼荼羅が江戸時代後期では四国八十八ヶ所惣霊場の標（しるし）であった事がわかるし、従来知り得なかつた一宮の信仰の一面を示している。室町時代には四国八十八ヶ所の成立に伴い、神社と無関係な大日如来曼荼羅を掲げ、遍路の信仰に応え、江戸時代には四国巡礼をなし得ない人たちのための八十八ヶ所信仰にも土佐神社は応えたのであろう。

土佐神社の名宝によせて

岡本 桂典

土佐神社は、高知市から南国市に越える大坂越えの西麓、高知市一宮にある。土佐神社は、延喜式内大社で古くより都佐坐神社、高賀茂大社といひ、土左大神・高賀茂大明神とも呼ばれ、土佐国一宮とされてきた。また俗に志那禰さまとも称されている。祭神は一言主尊とも味鋳高彦根尊ともいわれている。

土佐神社の創祀については、明らかではないが、『日本書記』の天武天皇四年（六七五）三月二日の条に「土左大神、神刀一口を以て、天皇に進る」とあり、また朱鳥元年（六八六）の八月一三日条に「秦忌寸石勝を遣わして、幣を土左大神に奉る」（新訂増補『國史大系日本書紀』後篇 昭和五九年四月）とあり、祭神は土左大神である。この祭神は、在地の豪族が祭祀したものと考えられている。『土佐国風土記』逸文（『高知県史』古代中世資料編 昭和四六年四月）には「・土左の高賀茂の大社あり、其の神のみ名を一言主尊と為す。其のみ祖は詳かならず。一説に曰へらく、大穴六道尊のみ子、味鋳高彦根尊なりといへり。」と

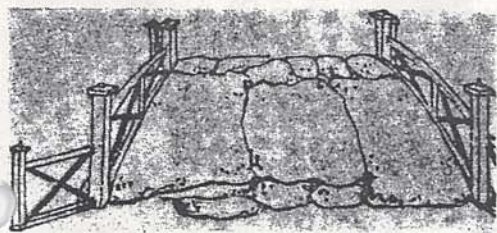
あり、祭神の変化がみられ、祭神を一言主尊と味鋳高彦根尊としている。

『続日本記』の天平宝字八年（七六四）十一月七日の条には大和の葛上郡の高鴨神のことを語る中に賀茂氏の先祖神が、雄略天皇と争ひ土佐に流され、後に賀茂氏の先祖神であることを知り、大和葛上郡に迎えられた神であるという記載がある（新訂増補『國史大系続日本記』後篇 昭和五九年四月）。祭神の変化は、賀茂氏の勢力が土佐に及んだ後のこととされている。土佐神社は、土佐に勢力を張った賀茂氏の祖先を祀った社ともいえる。

一宮古墳群と土佐神社

土佐神社の東西に二基の古墳群が存在していたが、現在は墳丘等は消滅している。一号墳は、土佐神社の東の東天神と呼ばれる山麓にあった。消滅した時期は不明である。もう一基は、土佐神社の西方約一〇〇mにあった。所在地を大塚といひ、明治二〇年（一八八七）に旧国道三三号線を造るときに破壊された。その時に、古墳の横穴式石室と思われる天井石に使われた石三個を鳥付川に架ける橋材としている。

この橋は以後太古橋と称されている。現在、県交通のバス停留所に太古橋というのがある。『皆山集』には、このことについて「一宮村大塚ノ寸尺、奥行九六間五間半許、高サ九七尺、広サ九七八尺、南ノ方入口、北ノ方閉ク石ニテ、笠ニ用石四ツ、外ニ一ツ此分ハ先年一宮樓門前ノ橋ニ取用、左右ニ立テタル石六ツ片方三ツ允、此分ハ新道ノ太古橋ニ取用・・・」（『高知県史』考古資料編 昭和四八年三月）とある。また、土佐神社の樓門の橋に使われたことがわかる。さらに、土佐神社前の石碑としても用いられている。この古墳からは、須恵器・鉄鍔・馬鐸などが出土したといわれており、土左大神（土佐神社）との関係が十分に考えられる。

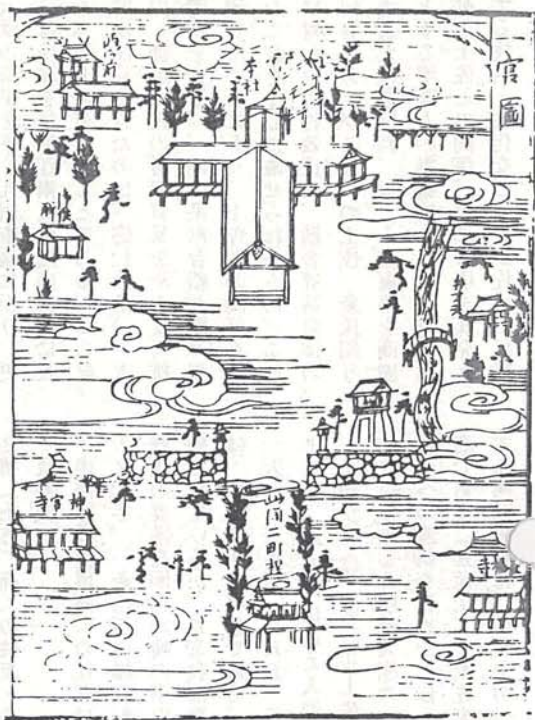


「太古橋図」（明治二十年七月十六日「高知日報」、後「高知県史」考古資料編所収より）

土佐神社と四国遍路

土佐神社は、『延喜式』神名帳に記載された延喜式内大社で「土佐郡五座、大一座、小四座、都佐坐神社大」（『新訂増補國史大系交替式・弘仁式・延喜式前篇』昭和六年五月）とあり、『三代実録』（『新訂増補國史大系日本三代実録』前篇 昭和六年五月）の貞観元年（八五九）正月二十七日条に「土佐国従五位下都佐坐神從五位上」と昇階記事がみえる。『百鍊抄』元仁元年（一一二四）十月六日の条に土佐国一宮の社殿が大風のため残らず倒壊したとある（『新訂増補國史大系百鍊抄』昭和五八年十二月）が、その再建は明らかでない。さて、土佐神社は一宮ともいいうが、一宮という呼称がみられるのは、先の『百鍊抄』からである。一宮という神社を各国に一社置く中世的神社制度といえる一宮制が、全国的にみられるのは、十一世紀末から十二世紀初頭頃とされている。この一宮制は国ごとに多様性をもって成立したとされている（伊藤邦彦『諸国一宮制の展開』『歴史学研究』五〇〇号）。土佐では、式内大社であった現土佐神社が一宮として転化したのである。

永祿六年（一五六三、同五年ともいわれる）に本山氏や吉良氏は、長宗我部氏の居城岡豊城を攻め、その際一宮



第三十番一宮図

(「四国徧礼靈場記」昭和62年3月より)

村の民家に火を放ち、その火災により土佐神社も被災、本社殿のみを残して焼失したとされている。その後、長宗我部元親は、永祿十年(一五六七)に再建に着工し、元龜元年(一五七〇)に棟上げ、翌年に竣工している。元親は、土佐国分寺の金堂も再建しているが、そこには中世的神社体制の一宮制を利用し、一宮における祭祀権を握り実質的に土佐の支配者たらんこと示さんとしたことがうかがえる。

現在の四国八十八ヶ所霊場は、神仏分離により札所がかつての札所と異なっているとある。四国霊場第三十番札所は、善樂寺と安樂寺が三十三番札所となっていた。しかしこれは、明治時代の神仏分離以後のことである。

明治以前は、三十番札所は土佐一宮が中心的な札所であったと考えられる。

土佐神社には、遍路の落書きが多くあった。たとえば、「四国遍路の身共只一仁、城州之住人藤原富光是也、元龜二年(一五七二)式月廿七日書也」、「あら〜御はりやなふ〜、何共やどなくて、此宮にとまり申候、かきよくもかたみとなれや筆の跡、我はいづくの土となるとも 元龜三年六月五日(近藤喜博「四国遍路」昭和四七年六月)とある。真念選の貞享二年(一六八五)の「四国徧礼道指南」には、「三十番一の宮、百々山神宮と云本尊坐像阿弥陀如来、秘仏作者不知、此宮高鴨大明神也・」とあり、ご詠歌にも「人おおく立あつまれる一つの

みや、むかしも今も、さぬかな」とある。元祿二年(一六八九)の寂本の「四国徧礼靈場記」には、「一宮図」がある。そこには、神宮寺なども描かれているが、一宮が中心に描かれている。このことは、一宮が霊場の中心であったことを物語っている。

近世には、山内氏の崇敬が厚く、二代藩主忠義は、寛永八年(一六三二)楼門を建立、慶安二年(一六四九)には鼓樓を建立している。

明治時代に神宮寺などの仏教関係の文化財が散逸してしまっている。本尊の阿弥陀如来は安樂寺に、不動明王は国分寺に移されたとされている。仏教関係の資料が散逸したのはすこぶる残念である。時代のいたずらでもある。

このように神社も時代の流れのなかでほんろうされているのである。人々の祈りを込めたものも同じである。

土佐神社の伝世品

土佐神社には、鯨尾矛しんごぼうと呼ばれる銅製の大型の矛が古くより伝世されている。志那禰様の御神幸にこの矛は使われている。この矛の大きさは、身の長さ八七cm、幅一三・六cmの扁平な矛で、下部にふくらんだ玉がある。下部から身の中程にかけて柄を差し込む穴がある。この矛は、玉矛と呼ばれるもので、奈良時代から平安時代の初期にかけてのものと推定されている。本

来は、降魔のために振りかざすためのものであったと考えられる。

土佐神社に懸けられていたと思われる天文二十一年(一五五二)銘の罅口もある。この罅口には、土佐神社の本地仏である阿弥陀種子(キリーク)を刻している。このほかに古鏡が四五面、面が五一面、七夕に用いられた勾玉などが伝世している。これらの鏡は、非常に保存状況がよく、実に美しい。



菊花双鳥方鏡

四五面のうち四二面が市の指定になっている。鏡は、中国宋代の湖州鏡と和鏡に分類でき、これらの鏡は末社の御神体となっていたものもあるが、ほとんどが奉納鏡と考えられる。

土佐一宮の御正体が、かつて徳島県で確認されている。それには、天文一八年(一五四九)の年号があり、「土州一宮加茂□□御正体」とある。これらの伝世資料や地下資料は、土佐神社の歴史を語ってくれている。

「秀吉と桃山文化」講演会から

「戦国・織豊期の南海路と土佐」

— 一向宗教線を中心として —

秋澤 繁



(1)問題の所在

南海路とは、当該期「畿内の門戸」堺を起点として、南海道諸国(紀伊・淡路・阿波・土佐)から豊後・日向・大隅の沿岸を下り九州南端に至り、更には琉球を経て江南(中国南部)に及ぶ「海上の道」のことである。この航路が注目されたのは、応仁の乱後、大内・細川両氏の対明貿易をめぐる対抗関係を背景に、細川系勘合船が屢々利用したことにあり、土佐との関係もまたこれを中心に論ぜられてきた。これに対し故下村效氏は、勘合貿易自体の限界性およびこれへの土佐一条氏関与の過大視を批判、むしろ南海路を商圏とする堺商人の継続的・日常的経済活動と土佐との関係、更には堺を媒介とする技術・文化などの、土佐への伝播

こそ追求さるべきであるとの視角を提示されたのである。

ここでは下村氏の視角を継承、まず同氏が具体化されなかつた長宗我部期堺(上方)商人を瞥見、そこで一向宗(浄土真宗)門徒に着目、ついで従来不問に付せられてきた土佐一向宗を採り上げてみたい。土佐の一向宗は、何時どのような教線を介して展開したか、南海路との関連如何、その伝播に土佐の諸権力はどのように対応したか、これらが主たる関心事である。

(2)堺(上方)商人の往反・来住と長宗我部氏

南海路經由堺商人の往反については、天文初年、一条治下の幡多郡や国人津野氏の要港高岡郡須崎の事例が既に指摘されているが、長宗我部期については、殆ど不明の現状である。

天正一三年(一五八五)元親の初度上洛時、堺での出迎え人問丸次喰屋(元親記)は、同三年土佐統一時、早々に下向した堺商人団の一人であり、信長への連絡を務めたと伝えられる政商である(長元記)。土佐東端と隣接する阿波吉喰は、中世上方への材木輸

出港として知られた地で、恐らく土佐材を介した結び付きであろう。「堺衆・喰屋」の実在は、長岡郡片山郷地帳に明らかである。

同一六年(一五八八)吾川郡浦戸地

帳帳は、未だ支城段階の状況を示すが、その「町やしき」には、他国来住商人と思われる居住者が検出出来る。「アマカ崎」の地名を冠せられた二人は、摂津尼崎の伝統からみて材木商であろう。千勘介・四郎左衛門尉は、堺の利休一族と思われる。利休は、阿波蜂須賀城下へ孫魚屋立安を送り込んでいたのである。「樽や」は、天文五年(一五三六)須崎在住の「さかいあき人たるや与五郎」と関係すれば、堺商人である。ところでこれら商人と異なり、慶長五年(一六〇〇)山内入国以降も土佐に永住、領内屈指の豪商・商人頭と云われた櫃屋の宗旨は注目される。

「ヒツヤ宗助」はその初代、紀伊兵乱を逃れ長宗我部を頼り来国したと伝え、出身地は雑賀一揆五組の一つ十ヶ郷の松江、雑賀門徒である。因に、浦戸唯一の寺は、真宗道場であった。また来住は少し遅れるが櫃屋と双壁をなす播磨屋も一向宗、在姫路期の秀吉・元親の対陣中、後者に組した経歴、飾磨津出身からして、英賀門徒であろう。長宗我部は、反織豊の前歴をもつ門徒商人をも召致、経済力・軍事力の強化を

企つたのであり、ここに上方商圏と土佐での一向宗展開との関連が問題となる。

(3)一向宗教線と南海路

土佐一条氏は享禄五年(一五三二)

以前領内一向宗への禁教令を出していたが、高岡郡与津渡辺氏など鉄炮・船・金融業など有用性をもつ家臣には、個別的にこれを認めていた。天文五年(一五三六)石山本願寺に勧進物千疋・太布五十反が土佐より送られ、内五百疋は「真宗寺下より」とあれば、堺真宗寺を中心に、微弱ながら複数経路の布教が進行しつつあった状況が判る。その後の適確な史料欠除のため、近世一向宗の諸派・本末関係の在り方を概観、その系譜を求めてみよう。

寺院録は、延享四年(一七四七)对藩差出を基本とし、一八世紀末の寺院状況を包括的に記す史料である。これによれば、一向宗の寺・道場数九二、真言・禪に次ぎ、その地域分布は、海岸部に稠密で、山分には殆どなく、また西の大郡幡多での稀薄さが目に立つ。開基は不詳・不確実が多いが、一六世紀中(永正一・文禄年間)三ヶヶ寺、戦国家臣・村落支配層と伝える。幡多郡の稀薄さは一条氏禁教の歴史を反映する如くである。

宗派別では、仏光寺派六を除き、本願寺派が八六と圧倒的多数を占め、そ

の内西派が主流である。東西両派間の転派、西派内部での本末関係の流動性など問題を残すが、差当り東派直末二五、西派六一ヶ寺の内訳は、直末二九、高知真宗寺系二一、堺善教寺系三、大坂天満定専坊系五、京興正寺系三と整理出来る。この内土佐最大の一向宗寺院で西派触頭でもあった高知真宗寺は、もと受法寺と称する堺真宗寺の中本寺で、寛文三年（一六六三）本寺が東へ転派した際、本山より寺号の継承と寺班の昇格を命ぜられた経緯があり、従って本来は堺真宗寺系と位置付けられよう。これら西派四系の内、定専坊を除く三系は、藩初（慶長―寛永期）

全てその存在が確認される。真宗・善教兩寺は「堺三坊主」、定専坊は「大坂六坊主」の内に数えられ、門主に近侍する有力寺院であり、就中真宗寺は、天正一四年（一五八六）顕如が大坂御堂建立のため西国（中国・四国・九州）門徒中へ志納金を課した時、その取次寺でもあったのである。これら諸寺と土佐あるいは西国各地とを直結さすのは海上の道であり、交通手段としての船を要するが、真宗・善教兩寺は大船を有し、各寺を支える豪商中には廻船業者も含まれていた。畿内への材木中継港尼崎と定専坊は、深い関係がある。

これに対し、四国山脈越えの陸路に

より土佐の線伸したと思われるのが興正寺系である。拠点は阿波美馬郡郡里の安楽寺で、同寺の寛永一三年（一六三六）末寺帳は、その具体的寺名には疑義もあるが、土佐八ヶ寺を挙げてゐる。なお土佐の仏光寺派形成は、二代藩主山内忠義娘が同門跡室であり、同派の中村蓮光寺が寛永期には真宗寺末であったことなどからみて、藩政期に入ってからのものである。

各系中心寺院の開基由緒地をみるに、真宗寺―吾川郡浦戸、正念寺（善教寺系）―高岡郡宇佐、大善寺（定専坊系）―高岡郡蓮池、円光寺（興正寺系）―香美郡山田と分散しており、最後を除き海港ないし通航可能な立地にあり、南海路を通じての複数教線の上陸地を予想させる。そして蓮池・山田は戦国期国人の土居・城・市町の所在地であった。以上、近世史料から一向宗伝播の系譜を模索したが、次に長宗我部地検帳によりその妥当性を検討してみたい。地検帳は、天正一五―一八年（一五八七―九〇）の総検、一部は慶長二年（一五九七）再検時のもので、一向宗寺院所在検出のキーワードは、「道場」・「トウテウ」である（一覧表省略）。

地検帳によれば、道場関係表示があるもの一五ヶ所、坊主居所一ヶ所、近世寺号と合致するもの三ヶ所、所在

は、安芸郡（甲浦・田野・雲）、香美郡（手結・山田）、長岡郡（種崎・江村）、土佐郡（大高坂）、吾川郡（浦戸・御壘瀬・弘岡上・下）、高岡郡（新居・宇佐・蓮池・須崎・半山・与津）、幡多郡（川登）の計一九ヶ所で、その内実に一二ヶ所が海港、幡多郡では四万十川中流の一ヶ所に過ぎない。近世寺院録段階とは寺・道場数に著しい懸隔があるにも拘わらず、その地域分布の傾向性は全く同一であり、殊に各系中心寺院の開基由緒地が総て地検帳上確認されることは、堺を中心として土佐へ伸長した上方有力一向宗寺院の教線が、天正後期その基本的展開を終えていたことを裏付けている。

南海路經由では、堺の真宗・善教兩寺が浦戸・宇佐、大坂定専坊が蓮池へ、また吉野川横谷沿いに南下した興正寺系安楽寺が山田にそれぞれの拠点―道場を構築した時期は詳らかでないが、戦国期をかかり遡るかもしれない。また本城半山姫野々と外港須崎の二ヶ所に道場が確認出来る一門津野領では、もしこれが独立的国人津野氏段階よりの継承であれば、別途流入した教線も想定されよう。いずれにせよ一向宗の伝播が東中部土佐へ偏っているのは、一条氏禁教の影響は云うまでもないが、特に南海路經由の場合、堺兩寺傘下の豪商門徒、定専坊と結ぶ尼崎商人の木

材を主力とした交易活動との関係も視野に入れる必要がある。東土佐は距離的に近いのみならず、搬出の便に恵まれた山林を有し、すでに室町中期、安芸・香美兩郡の海港は、良材の輸出地として、上方市場で知られていたのである。地検帳の道場七は市町または隣接して所在する。このように長宗我部氏は一条氏とは異なり、堺（上方）商圏と密着する一向宗の伝播を積極的に受け入れ、整備中の領内市場網との結合に活用せんとしたと思われるが、家臣門徒対策は如何であろうか。

浦戸道場の池慶乗、山田道場開基の依光空念は、主力水軍池氏、大津小田辺島城主依光氏の一族であるが、石山合戦の時、信長から門徒殺害令が出、あわやと云う時、空念の所持する父國親の感状をみて、元親に許されたと伝えられる。これは有効な門徒軍勢力は利用するが、内外への自由な布教には統制を加えた権力の姿勢を象徴する挿話であろう。当該期土佐での一向宗展開は点と線であり、むろん一揆はみられない。

以上、自らの長宗我部―一領具足論克服の一試論であるが、更めて南海路の重要性を痛感した次第である。

平成九年一月一八日の講演会の内容を
ご本人にまとめていただきました。

「秀吉と桃山文化」講演会から

「秀吉像を探る」

大阪城天守閣館長 渡辺 武氏

秀吉の素顔

秀吉といえは、誰もが一度は会ったことがあるような、その人なりのイメージを持っていると思いますが、実際のところ、秀吉という人はどのような顔をしていたのでしょうか。

逸翁美術館所蔵の「秀吉像」や、秀頼が絶賛したという伝承のある豊国神社所蔵の「秀吉像」（出品資料）などは、その制作時期や状況から、かなり正確に秀吉の素顔を伝えていていると考えられます。これらの資料に共通する点として、額の深い横じわ、くぼんだ眼窩、切れ長の目、目尻のしわ、出ばった頬骨とその下部のへこみ、角ばった顎、よく通った鼻筋、ぶ厚いくちびる、大きな耳などがあげられますが、やはり秀吉は、ある程度「猿」に似た容貌だったようです。

秀吉の伝記

秀吉の伝記としては、「太閤記」「絵本太閤記」などが知られています。千成瓢箪に代表される、かなり誇張され、脚色された秀吉のエピソードが記されているわけですが、同じ伝記でも、

秀吉自身が毛利攻めから小田原攻略戦

にいたる数々の武功を、現在進行形の形で側近の大村由己に書き綴らせた「天正記」の存在は見逃せません。本人自身が、歴史の推進役としての自らの行為を的確に自覚していたということとは驚くべきことであり、かのシーザーやアレクサンダー大王、あるいはヒトラーやスターリンでさえも、この「天正記」に匹敵するものは作り得ませんでした。秀吉はこの伝記を通じて、自らの正当性を世に喧伝し、権力を認知させようとしたのです。まさに、情報戦略に長けた天才的な広報マンであつたのです。

秀吉の自筆書状

秀吉という人は、手紙を通してみれば、極めて率直で、あけつびろかざりは、極めて率直で、あけつびろげで、相手の心をつかむためにあけつびけにものを言います。しかも書く文字たるや、当時の武将や公家の水準からすると恐ろしく我流、無茶苦茶であります。現代のわれわれから見ると、スビード感のある達筆のように見えますが、文法も仮名遣いもでたらめ、漢字

をほとんど使わず、ひらがなとカタカナばかりで、知っている漢字は総動員です。文章としては極めて稚拙であります。しかし、不思議な温かみがある。下手くそではあるけれども、相手の信頼を得るために、切々と真情を伝える長文を書いている。これに相手はころっとくるわけです。黒田官兵衛宛の手紙などには、「その方のことは弟同様に思っている……」などと齒の浮くようなことを書きつらねており、「ひとたらし」戦術の一端を知ることができます。

秀吉の経済感覚

また二、三年前に発見された小出甚左衛門秀政に宛てた書状にも興味深いことが記されています。本状では、(一)赤鍋(陣中で使う銅製の鍋)を借金してまでも大量に購入すること。(二)具足屋彦一の扶持(給料)は昨年同様でよいという二件について指示した後、自筆の追伸として、「もし、米の相場が高ければ、そちらの兵糧米を売却して金銀に換金しておくように」という意味のことを書き記しています。

この書状は、秀吉の花押の特徴から、天正五〜十年頃にかけての織田信長の部将時代の書状と推定されるものです。この頃すでに秀吉は、ずば抜けた経済感覚を身に付けていたようです。つまり、家臣団に対する武器兵糧の一

括調達と、それを専属に取り扱う武器商人を雇うことにより、合理的かつ経済的な軍資金の運用をはかっていたこと。また、商品経済に着目し、米が高値の時にはどんだん兵糧米を売却して金銀に換えておくという、まるで現代の相場師のような指示を出していること。このことは、秀吉が当時の戦国武将の中で、際立って近代的な経済観念の持ち主であったことを示しています。秀吉は、敵を何人殺したかということよりも、長期包囲戦術などにより、味方を傷つけず、敵の城も、武士も丸ごと手に入れる戦を得意としましたが、これも彼自身の経済哲学に裏付けられていたのでしょうか。

一方、刀狩や検地、家臣の配置転換などの強行は、並みの戦国武将とは比較にならないほどの厳しさを示しました。

こうしてみると、秀吉という人は、知れば知るほど魅力的ではあるけれども、政治家としては恐るべきスケールの大きな人物だったことが分かります。今回の展示品の中にも、こうした秀吉の素顔に迫る実物資料がたくさん展示されており、後世に脚色された秀吉像をぬぐいきり、真実の歴史の醍醐味を存分に堪能していただきたいと思えます。

(文責 野本)

神道考古学の本

「神道に関する諸現象を考古学的に研究する学」を「神道考古学」と呼称している。この「神道考古学」を提唱されたのは、國學院大學教授故大場磐雄博士（「神道考古学の提唱と其組織」『神社協会雑誌』三四一、昭和一〇年（一九三五）後、「神道考古学論攷」昭和一八年 所収）である。

大場博士のいう「神道考古学」の意志を継いだ地域研究が、戦後一部ではあるが徐々に行われるようになってきている。

さて、高知県において神道考古学研究の対象となった資料は、埋没資料（埋蔵文化財）と地上資料の両者である。その成果の一部をまとめたのが、昭和六二年に刊行された岡本健児氏の『土佐神道考古学』（編集・高知県神社庁報編集委員会、発行・高知県神社庁）である。本書は、土佐における「神道考古学」を五つに大別してまとめたものである。一般には入手しがたい「高知県神社庁報」に掲載されたものをまとめたもので、項目別に短編になっており、県内各地に調査に赴いた時の調査記録という面ももっている。

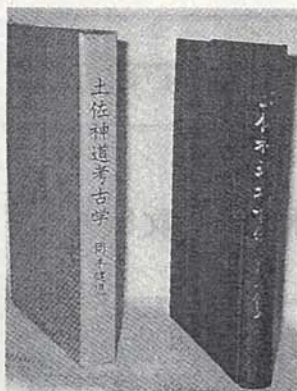
そこには、我々が神社等に出かけた時には、みられない資料についてもわかりやすく論じてくれている。

宗教を対象とする考古学は、その宗教の教義の反映として物を捉えている。近年、その資料から「ココロ」を読みとるという方法も試みられている。そこに宗教考古学の本質があるように思える。

近年、社会の変容等により、いわゆる共同体が崩壊し、地域の神社の管理ができづらくなっているという。そこに残る我々の心の原風景も失われつつある。まさに、そのような状況のもと、再度「神道考古学」の意味を考えてみることも大切ではなからうか。

（B5版 三二八頁 定価三、〇〇〇円）

（岡本）



コア・ボイス

特別展「秀吉と桃山文化」によせられたアンケートからご意見を紹介いたします。

「大坂夏の陣図屏風」の展示をしてある期間が短いため、混雑していて、見にくかった。せつかく高知に来てののだから、もっと長時間展示してほしいかった。

（36才南国市女性）

企画展示室の展示スペースをひろげてほしい。

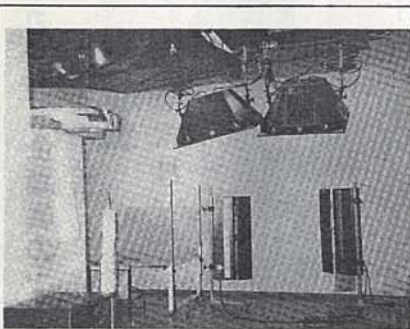
（36才高知市男性）

展示資料の数が多いため、ゆっくり見ると1時間かかってしまいます。時間がなくて残念でした。

（35才高知市女性）

駐車場が狭いのに驚いた。

（65才中村市男性）



歴民スポット⑫ 写場

博物館は実物資料はもちろんのこと、二次資料とよばれる写真、模型、図書資料なども作製・収集をして大切に整理、保存をしています。写場では、刊行物に載せたり、カードへ添付する資料写真などを撮影しています。外部の光の影響を受けないように窓がなく、大型のライト、背景のスクリーンなどを備えていて、博物館の写真スタジオです。

（曾我）



子ども歴史教室「秀吉展をみよう」

4～6月の催し物

〔企画展〕

4.4～6.1	土佐神社の名宝	土佐神社には、多くの奉納された資料などが残っています。これらの資料を展示紹介します。
---------	---------	--

〔講演会〕 午後2時～4時 はがきによる申込 聴講無料 先着100名。

4.19(土)	「和鏡の成立と展開 ～土佐神社奉納鏡を中心に～」	久保智康 先生 (京都国立博物館主任研究官)
5.10(土)	「神仏混淆期の神と仏の考古学 ～土佐神社を中心に～」	岡本健児 先生 (高知県文化財保護審議会委員)

〔子ども歴史教室〕 *電話にてお申込下さい。 親子連れ可。先着順。

6.14(土)	れきみん探検	ふだん見ることのない歴史の裏側を、学芸員と一緒に探検してまいります。10～12時。
---------	--------	---

〔史跡めぐり〕 *申込書にて受付 参加費必要 申込多数の場合は抽選。

5.3(土)	吉良川の御田祭	室戸市吉良川町の国指定重要無形民俗文化財「御田祭」を見学します。
--------	---------	----------------------------------

〔臨時休館のお知らせ〕

資料燻蒸のため、平成9年6月24日(火)～29日(日)を休館日と致します。

〔平成九年度 企画展のご案内〕

土佐神社の名宝

四月四日～六月一日



なますおのほこ
鯨尾矛

四万十川 漁の民俗誌

七月一八日～九月二三日



中村市間崎 柴漬け漁

いざなぎ流の宇宙

―神と人の物語―

一月一四日～平成一〇年一月二五日

歴史と美術 維新の群像 (前期)

平成一〇年三月二〇日～四月一九日

〔歴史館日録〕

月 日	出来事
平成九年	
一月五日	開館
一月七日	「秀吉と桃山文化」後期スタート
一月一八日	子ども歴史教室「秀吉展をみよう」
一月二八日	企画展講演会
一月二九日	子ども歴史教室「秀吉展をみよう」
一月二六日	「秀吉と桃山文化」閉幕
一月二六日	展示入替のため臨時休館
一月二六日	子ども歴史教室「火おこし」
一月八日	講座「いざなぎ流―神々の世界―」
三月一日	子ども歴史教室「親子史跡巡り・元親の足跡」
三月八日	子ども歴史教室「親子史跡巡り・元親の足跡」
三月一五日	史跡巡り「藩政期の中村」
三月二二日	史跡巡り「町並みウォッチング」

へびこいこい

秀吉展では、二六、六九一人もの入館者がありました。会期中は館の中も外も人・人・人の大にぎわいで、職員一同大わらわでしたが、おかげ様で開館五周年にふさわしい内容になりました。(野本)

平成九年三月二日

編集・発行 高知県立歴史民俗資料館

〒783南園市岡豊町八幡10999-1

TEL 0888(62)2211

FAX 0888(62)2110

開館時間 午前9時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日)

ある場合は火曜日(12月28日)

1月4日

入館料 通常期(常設展)大人18才以上100円

団体(20人以上) 30円

高校生以下は無料

療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳・

障害者手帳(1・3級)所持者とその介護

者(1名、高知県長寿手帳所持者は無料)

印刷・川北印刷株式会社